
Fate ~ 双子のサーヴァント ~

飛妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e ー 双子のサーヴァント

【Nコード】

N 6 5 6 8 N

【作者名】

飛妖

【あらすじ】

ランサーに殺され掛ける士郎

そして、間一髪そこに現れたのは・・・小さな二人の女の子だった

-
-
-

プロローグ

「もしかするとボウズが七人目だったのかもな」
そういい、青い男 - - ランサー - - は槍を向ける。

「だが、今度こそ終わりだな。
よく頑張ったぜ、ボウズ」

そんな言葉は聞こえない。

目に入るのは紅い穂先。
つい数時間前にこの胸を抉った凶器。

あの感触を覚えている。
あの感覚を覚えている。
心臓を突き破る冷たい感触。

肉体が死に侵されるあの感覚。

あんなモノを、もう一度味あわされるのか。

殺されるっただけであり得ないのに、それが一日に二度。

何も分からず殺される。

何も知らないまま命を落とす。

そんな理不尽認められるかよ。

そんなのは、あの、『地獄』だけで、十分だ。

こんな所で、何も知らずに、訳も分からず

「殺されて、たまるかああああ!!」

瞬間、光が満ちた。

目映い光の中、言葉を発することすら忘れた。

眩んでいると言つのに、その瞳は鮮明にその姿を捉え、写し込む。

光の中から現れたのは……

「ねえ、アリス？」

「なあに？　ありす」

「このお兄ちゃんがあたし達のマスターかな？」

「きつとそうよ、ありす」

……二人の小さな女の子だった……

第一話〜双子のサーヴァント〜（前書き）

取りあえずあります&アリスを出したかったからマスターだったあり
すをサーヴァントにした。

ちなみに瞬間移動とかもする。

第一話〜双子のサーヴァント〜

「それじゃあ、アリス？」

あの青いお兄ちゃんは？」

「あれは敵よ、あります」

「敵？」

「そう、だから遊んであげましょう」

などと、目の前の少女達は無邪気に話している。

「うん！ 遊ぼう遊ぼう！」

そう言い女の子達はランサーの方へ歩きだす。

「っ！？ 駄目だ！ 危ない！」

とっさにそう叫ぶ

が・・・

「大丈夫よ、お兄ちゃん」

「そう、ただ遊ぶだけなんだから」

双子はそう言っているとランサーに向きなおる。

「一度に二体のサーヴァントだと!?
ちっ、イレギュラーか!
おい、お嬢ちゃん達!
クラスは何だ?」

「あたし達はキャスターよ、ねえあたし(アリス)?」

「そうよ、あたし(ありす)」

「ちっ、イレギュラーな上にクラス重複と来たか・・・
だが、可哀想だが、ここで退場して貰うぜ!」

ランサーが双子へ槍を突き出す。

しかし、槍は虚しく空を突いた。

「何?」

ランサーが驚き目を見開く。

双子は一緒にランサーの後ろへ移動していたのだ。

恐らく空間転移。

「へえ、そんなナリでも立派な魔術師って事か……」

「いけないんだ」

まだ何して遊ぶかも決めてないのに」

「いけないお兄ちゃんにはお仕置きが必要ね」

「お仕置き？」

「そう、首をちょんぎっちゃうの」

「痛くない？」

「大丈夫よ、サーヴァントだもの」

そんな恐ろしい事を双子は無邪気に、笑いながら言っている。

「ハ、ちょんぎられる訳には行かねえんでな

ここで消えて……」

あん？ 何だと？ チツ、わーっただよ！」

ランサーが誰かと話し、殺気が消える。

「ウチのマスターが帰って来いってさ」

たくよ、これからだってのに
んじゃ、そう言う訳だからお嬢ちゃん達、今回は退くぜ
じゃあな、ボウズ、中々、癖のあるサーヴァントみてえだが俺がボ
ウズの心臓を貰い受けるまで死ぬんじゃねえぞ」

ランサーはそう言うと夜の闇の中へと消えていった。

「あ、お兄ちゃん行っちゃった。」

「あーあ、つまんないの」

俺は残念がっている双子に近づく。

「え、と・・・」

君達は一体何なんだ？」

「あ、お兄ちゃん！

何って、ありすはありすだよ？ ねえアリス？」

「そうね、ありす、でもお兄ちゃんが聞きたいのはそうじゃないみ
たい」

「違うの？」

ありす（薄い水色の服を着ている方）が首を傾げながら効いてくる。

うぐ、無意識に可愛いと思ってしまった・・・

「あ、ああ、俺が聞きたいのはマスターとかサーヴァントってどう
いう事なのかって事だ。」

すると、ありすは「むー」と考え込んだため

アリス（黒い服を着ている）が教えてくれた。

「聖杯戦争・・・」

俺はもう少し詳しく聞こうと質問をしようとした時

「ちょっと！ 何でサーヴァントが二人もいるのよ!？」

と、第三者の声が響いた。

「と、遠坂?」

第二話 〱 バーサーカー 〱 (前書き)

セイバーが霊体化出来る!?

第二話（バーサーカー）

「と、遠坂？

何で家にいるんだ？」

「勝手に入ったのは謝るわ。

でも、あなたも魔術師だったのね。」

魔術師

遠坂の口からそんな言葉が出た。

「って事は、遠坂も？」

「ええ、でも吃驚したわ、まさか私の知らないモグリモグリの魔術師がこの町にいる何てね。」

「まあ、俺は魔術師と言っても殆ど一般人と変わりなかったからな・
・・」

「ふうん、それじゃ、その子達があなたのサーヴァント？
ずいぶん可愛らしいわね

何で二人もいるのか聞きたいけれど？」

あ、何か遠坂がキレてる？

なんでぞ。

「ていうか、俺自身よくわかってないんだが・・・
アリスからちよっと聞いたけど、まだ分からない事が多い」

「呆れた、聖杯戦争の事を何も知らないでサーヴァントを召喚したの？」

「ああ、もしよかったら遠坂が教えてくれないか？」

そう言うと遠坂は少し考える素振りを見せて

「いいわ、教えてあげる。」

了承してくれた。

「危険です！ リン！」

すると遠坂の後ろにいきなり女の子が現れた。

「大丈夫だから消えていなさいセイバー」

女の子 - - セイバー - - は遠坂に言われ最初は渋っていたが諦めたのか再び消えた。

「あ、お姉ちゃん、消えちゃった。」

「一緒に遊ぼうと思ったのに、残念ね」

双子はそんな事をいいながら何をして遊ぶかを決めていた。

「そ、それじゃあ、中に入れてくれ。」

・
・
・
・
・
・
「……と、言うわけよ。」

聖杯戦争。

7人のマスターとサーヴァントの殺し合い。

そんな事がこの町で起こっていたのか。

「本当なのか？」

「ええ、全部本当の事よ。」

「待て待てー！」

「あはは、鬼さん、こちら〜」

トタトタトタトタ・・・

「・・・そうか、そんな事が・・・」

「取り敢えず、今からあなたを教会に連れて行くわ
そこで、この戦争に参加するかしないかを決めなさい。」

トタトタトタトタ・・・

「捕まえたー！」

「捕まっちゃったー」

「じゃ、次はあたしが鬼ね！」

トタトタトタトタ・・・

「・・・教会？」

「ええ、新都の郊外にある言峰教会よ
そこにこの戦争の監督役がいるわ。」

トタトタトタトタ・・・

「待てー！」

「ほらほら、こっち、こっち！」

「って、いい加減にきなさい！」

あ、遠坂がキレた。

双子が鬼ごっこをしているのを途中まで我慢してたけど、我慢出来なかつたみたいだ。

「ひっ、お姉ちゃん・・・
怒ってるの・・・？」

ありますが目に涙を溜めて遠坂を見上げる。

「え、う・・・
い、いや、怒ってるわけじゃ、ただ少し静かにして欲しいだけで・・・」

子供の涙に遠坂が狼狽える。

「泣かないで、あります。」

怖いお姉ちゃんのない所で遊んでみましょう?」

「うん・・・」

そう言つて、二人は庭の方へ行き、また別の遊びを始めたようだ。

「誰が怖いお姉ちゃんよ!

まったく! じゃあ、行くわよ衛宮君!」

「あ、ああ」

・
・
・
・
・
・
・
教会へとやって来た。

何故かこの教会には嫌悪感がある。

ちなみに二人は霊体化も出来るみたいだが、格好が現代の物なので

普通に姿を晒して来た。

「リン、私はここで待っています。」

セイバーが言う。

アリス達はと言うと教会に咲いている花を見てあれやこれやと話しているため教会の中に入る気はないようだ。

「あれホントにサーヴァントなの？」

「いや、多分……」

「まあいいわ、行きましょつ。」

・
・
・
・
・
・
・
「このお花かわいい」

「そつね、ありす、持って行っちょつ？」

「採っても大丈夫かしら？」

「大丈夫よ。」

今、私の目の前で無邪気に遊んでいる双子のサーヴァント。

この子達は本当にサーヴァントなのでしょうが？
戦う姿がどうしても浮かびません。

こうして見ていると年相応の子供です。

「あなた達は。」

「ん？ なぁに？ お姉ちゃん」

「あなた達は、聖杯に何を願うのですか？」

「願いたい事？ 何かある？ アリス？」

「何も無いわ、ありす。」

「願いが無い・・・？」

「うん！ありす達はずっと一緒にいれればそれでいいの。」

と、凄くいい笑顔で返された。

「そう、ですか・・・」

そして双子はまた遊びに戻った。

・
・
・
・
・
・
・

教会で話しが終わり今は帰路へついている。

俺は聖杯戦争に参加する事に決めた。

いくら英雄って言っても子供を戦場に立たせるのは駄目だ。

あの子達は俺が守ればいい。

「それじゃ、ここで別れましょう。」

「ああ、色々ありがとな、遠坂」

「ふん、まあいいけど

次あった時は敵どうしよ。」

と、遠坂が言うが

「俺は遠坂と戦う気はないぞ」

「あなたね、あの話しを聞いてまだそんな甘い事言ってるの？
そんなんじゃ真っ先に死ぬわよ。」

何だかんだ言っても遠坂は心配してくれてるよな。

「じゃあ、私もう行くから。」

じゃあね、と遠坂が踵を返し歩き出そうとした瞬間。

「ねえ、お話は終わり？」

そんな言葉が聞こえた。

言葉の聞こえた方をみるとそこには小さな白い少女と小山のような
巨人が立っていた。

「何、あれ・・・」

遠坂が驚愕する。

「こんばんは、お兄ちゃん

会うのはコレで二度目だね」

少女はスカートの端を軽く持ち上げてお辞儀をする。

「二度目……？」

そうか、あの時の……」

以前、あった事のある少女だ。

「あなた、何者？」

「初めてまして、リン

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えば分かるかしら？」

「アインツベルン……！」

まさか、コレほどのサーヴァントを召喚するなんて」

「リン、下がってください！」

セイバーが不可視の剣を構え前にでる。

「それがリンのサーヴァント？」

それじゃ、そっちに居るのがお兄ちゃんのサーヴァントなの？
なんで二人いるの？」

「いや、それは分からない。」

本当に謎だ。

「ふうん、まあいいわ

どうせ、バーサーカーが殺しちゃうし

それじゃ、殺っちゃえ、バーサーカー！」

「

!!!!!!」

少女の言葉に巨人が動きだしセイバーへと巨大な斧剣を振り下ろす。

「はあっ!!!」

セイバーは斧剣を受け流し、斬りかかるがバーサーカーには全く通用しない。

そんな中

「うわあ、おつきいね、アリス？」

「ホント大きいね、ありす」

「あの巨人さんなら、あたし達のお友達と遊べるかな？」

「遊べるわよ、きつと」

「じゃあ呼んじゃおつか！」

「呼ぼう！呼ぼう！」

と、二人はこれまた楽しそうに話している。

「何を言ってるのかしら？」

イリヤスフィールが疑問を口にする。

「じゃあ呼んじゃうね！」

おいで、ジャバウオック！」

ありすが右手を空へと上げる。

その瞬間。

二人の背後に巨大な“何か”が現れた。

ありす&アリス紹介（前書き）

魔力を原作よりかなり上げてしまった・・・

ありす&アリス紹介

【キャスト】

何故か二人一緒に召喚されたサーヴァント

二人はそれぞれ、ありす（水色の服）アリス（黒い服）と呼びあう。
文面でしか違いがわからないのが難点

面ラ ダーW風に言うなら

二人で一人のサーヴァント

基本戦うのはアリス
ありすはアリスの援護などをする。

つまりまた仮 ライ W風に言うなら、アリスはボディサイド、
ありすがソウルサイド的な？

魔力凄まじく高く魔術師としては最高位。

【真名】

ナーサリーライム

筋力：E 耐久：E

敏捷：E 魔力：A
幸運：E 宝具：???

【スキル】

【変化：A+】

【自己改造：A】

【陣地作成：A】

【宝具】永久機関・少女帝国
クイーンズグラスゲーム

【固有結界】

《名無しの森》

対象の自我や記憶、更には存在の忘却を引き起こし、その果てには
全てを虚空の彼方に失った者を消滅させるという強力な固有結界。

第三話〜ジャバウォック〜（前書き）

ジャバウォックが強すぎるかもしれないがまあいいか。

ジャバウォックの大きさはバーサーカーと同じくらいにしておく。

第三話　ジャバウオック

「オオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!」

二人の少女が召喚した怪物が吼える。

あまりにも巨大な声に空気がビリビリと振動する。

「なに・・・あれ・・・?」

遠坂が呆然と呟く。

「サーヴァント、なわけないし

嘘、幻想種?」

流石の遠坂でも全く訳がわからないみだいだ。

素人の俺でも分かるほど膨大な魔力を放出している
あんな危険なモノを何の詠唱もなしに召喚するなんて馬鹿げてるに
も程がある。

セイバーも、イリヤスフィールも、あのバーサーカーでさえもこの
突然の事に呆然としている。

「さあ、ジャバウオック、いっぱい遊んで来なさい。」

「オオオオオオオ!!!」

少女の言葉に応え怪物……ジャバウオック……が吼える。

そして、真っ直ぐにバーサーカーのもとへと進んで行く。

セイバーは飛び退き、構えるが、ジャバウオックはセイバーなど眼中になくバーサーカーと対峙する。

「何よ、コレ、知らない！ こんなサーヴァントがいるなんて知らない！

バーサーカー！ ソイツを殺して、あの二人を殺しなさい！」

「————!!!」

イリヤの命令にバーサーカーは咆哮し、ジャバウオックに斧剣を振るう。

「ウオオオオオオオ!!!」

こともあろうにジャバウオックはその斧剣を素手で受け止めバーサーカーを殴る。

衝撃でバーサーカーがほんの少し後ろへと下がるがたいしてダメー

ジはないようだ。

「――！！！！！！！！！！」

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

そこからは壮絶だった。

息も忘れてしまう程の激しい巨人どうし戦い。

バーサーカーは斧剣を縦横無尽に振るい。

ジャバウオックはその斧剣を受けとめ、弾き、バーサーカーへと拳を叩き込む。

どちらも一歩も退かず永遠に続くようにも思われた。

しかし

「もう、いいわ

狂いなさい、バーサーカー！！！！」

少女の言葉によりこの戦いに終わりが訪れる。

「――！！！！！！！！！！」

「嘘、あれで、まだ狂化していなかったなんて・・・」

遠坂が呟く。

狂化。

バーサーカーの持つ、理性を完全に失うかわりにステータスを底上げするスキル。

「……………」

バーサーカーが斧剣を振るつ。

「ウオオオオオオ!!!!!!」

先と同じくジャバウォックは受け止めようとするが

「オオオオオオ!!!!!!」

狂化したバーサーカーの力に負け、受け止めきれずによるける。

その隙をバーサーカーは逃さず、斧剣を高く振り上げジャバウォックへと下ろした。

「オオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!」

バーサーカーの斧剣はジャバウオックのほぼ右半身はえぐり飛ばし
いつ死んでもおかしくない状態になっていた。

だがジャバウオックはそんな状態になってもバーサーカーへと向き
合う。

そして

「ウオオオオオオオオ!!!」

ジャバウオックが咆哮すると同時にジャバウオックの体から赤く
魔力がほとばしり

次の瞬間、ジャバウオックの腕がバーサーカーの胸を貫いていた。

「え・・・?」

それは誰が漏らした声だったのか。

ジャバウオックはそれで全ての力を使い果たしたかのように消えて
行った。

「やった・・・の?」

遠坂が呟く。

ジャバウォックの腕は間違いなく、バーサーカーの心臓を貫いたはずだ。

ならばこれで終わり。

バーサーカーは消えるはずだった。

それが普通であれば

「本当に驚いたわ、バーサーカーを一回殺す何て……」

少女の言葉と同時に動きを停止していた巨人が再び動きだす。

「一回ですって？」

「どういふこと？」

「バーサーカーの宝具“十二の試練”の力よ、リン

だからバーサーカーはあと十一回殺さなきゃ死なないの」

遠坂が驚愕する。

そんな、あんなケタ違いな奴をあと十一回殺さなきゃいけないなんて。

「十二の試練……
つてことはバーサーカーは……」

「そう、ギリシャの大英雄『ヘラクレス』よ」

「そんな英雄がバーサーカーのクラスで召喚されるなんて」

遠坂がさらに驚愕する。

「でも、私はそっちのお兄ちゃんのサーヴァントの方が驚きよ。
私のバーサーカーを一回でも殺せるモノを何の詠唱もなしに召喚するなんて。」

イリヤスフィールがありす達を睨みつける。

しかし当の本人達は

「ジャバウオック消えちゃった……」

「あの巨人さん凄いね」

「ヴォーパルの剣も使わずジャバウオックに勝っちゃった。」

などと話していた。

「ふん、今日の所は退いてあげるわ」

またね、お兄ちゃん」

イリヤスフィールはそう言うと巨人を引き連れ夜の闇へと消えて行った……。

「あー、まったく訳分からない事が多すぎるわ……」

「リン、私の出番が欲しいです……」

遠坂が額に手をつけ唸る。

セイバーのは……聞かなかった事にしよう。

第三話くジャバウオックく（後書き）

ちなみにジャバウオックが最後にやったのは『アリスイーター』で攻撃力底上げ 腕を槍のように伸ばしてバーサーカーの心臓を貫いた。

第四話〜同盟〜

「で？」

バーサーカーとの戦闘を終えて、俺達は家へと帰って来た。

そして、遠坂が開口一番にそう言った。

「え？」

「え？ じゃないわよ！

何なのよあれは！？」

「いや、俺に聞かれてもわからないぞ。」

大体、ついさっきまで聖杯戦争を知らなかった俺には本当にわからないぞ。

「あの子達本当にサーヴァントなの？」

あれだけ強大な幻想種をさも人が呼吸をするかのごとく簡単に召喚するなんて・・・

あの子達自身が戦ってたわけじゃないけど、もし強大な魔術なんかも無詠唱で使ったりしたらもうほとんど魔法使いじゃない・・・」

む、やっぱり物凄い事だったんだな・・・

「お姉ちゃん、一緒におままごとしよー！」

「しよー！」

「え、し、しかし私は・・・」

あんな子達が・・・

流石、英雄・・・ってことか？

「そういえば、あの怪物の名前、『ジャバウオック』って言ったわね・・・

確か、ルイス・キャロルのジャバウオックの詩に登場する架空の生物だったかしら？」

「架空の生物を召喚してたのか・・・」

「あとは鏡の国のアリスにもジャバウオックの詩があったわね

・・・確か、あの子達は自分達の事をアリスって呼び合ってるわよね？

あれ？ あれってまさか真名？」

「てことは、あの子達は鏡の国のアリスなのか？ いや、でもあれ童話だろ？」

実在しない人物が英霊になれるのか？」

「そこが分からないのよね。」

二人がそれぞれ『不思議の国』と『鏡の国』のアリスだとしても
実在しない人物が英霊になった何て事聞いたことないし……」

ありす達に聞いても分からなそうだしな……

「じゃあ、お姉ちゃんはいつもお腹空かせてる王様の役ね！」

「な、なんですか、その役は！」

「じゃあ、あたしは王様の首をちょんぎっちゃう魔法使いね！」

何かいつの間にかセイバーと仲良くなってるな……

あとアリス、笑顔でそんな事いっちゃいけません！

「まあ、いいわ、今はバーサーカーよ

まさかあんな規格外のサーヴァントが出てくるなんて思わなかった
わ。

だから衛宮君、バーサーカーを倒すまで私と同盟を組まない？」

「遠坂と同盟？」

「そう、悪い話じゃないと思うけど？」

それは願ったり叶ったりだ。

「分かった、よろしく頼む。」

「ええ、よろしくね、衛宮君

それじゃ、今日はもう帰るわ

また明日来るから。」

遠坂は立ち上がりセイバーに声を掛ける。

「わかった。

じゃ、夜道気を付けてな。」

「えー、お姉ちゃん達、行っちゃうの?」

「腹ぺこ王!」

「腹ぺこ王ではありません!」

「そ、それじゃあね」

「あ、ああ、またな、遠坂」

遠坂を玄関まで送り、別れる。

ありす達はずっと残念がっていた。

もっともアリスはセイバーの事をずっと腹ぺこ王と言ってセイバー

を怒らせていたが。

どうやらありすとアリスの性格は微妙に違うようだ。

これから大変になりそうだな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6568n/>

Fate～双子のサーヴァント～

2010年10月11日04時51分発行